

「文学教材の学習指導」

一 文学教育の課題を求めて一

本書は、著者が昭和二十七年から昭和四十七年までの二十一年間に文学教育の課題について発表された、その実践報告のなから二十編を選んで収録されたものである。

本書において著者は、大村はま先生がはしがきで指摘されたように、「生徒一人一人のこれからの生活のなかで、文学はどういう位置を占め、どんなはたらきをしていくことになる」か、「その日に備えて、今日は何をしておいたらよいか」という大きな課題をかかげて、「生徒の生活のなかに、これから長く成長しつづけていく文学の芽を確実に養おう」としている。

本書の目次は、次のようになっている。

Ⅰ 小説教材の学習指導

- 1 「城の崎にて」の鑑賞指導
- 2 「城のある町にて」の鑑賞指導
- 3 「山月記」鑑賞の試み
- 4 「はえ」(横光利一)の鑑賞

指導 5 「スペイン犬の家」(佐藤春夫)

- 6 「赤がえる」の学習指導
- 7 「赤がえる」の教材研究
- 8 「聖ジリアン物語」の指導をふりかえって
- 9 「俘虜記」の鑑賞指導
- 10 「夜明け前」指導の記録

Ⅱ 高校生の読書実態

- 11 太宰治の毒―ある読書実態
- 12 高校生の小説鑑賞の実態
- 13 高校生の読書実態―「挽歌」のばあい
- 14 高校生の読書実態―「ラブ・ストーリー」を中心に

Ⅲ 詩歌教材の学習指導

- 15 「あはれ花びらがれ」―「薨のうへ」の指導記録
 - 16 「秋の祈り」(高村光太郎)の鑑賞指導
 - 17 「富士山」(草野心平)の鑑賞指導
 - 18 詩の創作指導の試み
 - 19 「現代国語」における短歌・俳句の扱い
 - 20 近代短歌の鑑賞指導
- 本書から学ぶことは多くあるが、そのうち

の二つだけをあげる。まず第一に、著者が二十数年間、「われわれの現実には失敗の連続だ。その失敗を反省することが研究にならぬわけがない。」(あとがき)と考えて、自分の実践を厳しく分析し、そこから文学教育の課題を明らかにしようとしつづけていることである。そこには、「道」に対する徹底した厳しさ・謙虚さがある。また、根底には生徒を大切にす著者の心が脈々と流れている。この点で特に印象深いのは「太宰治の毒」の報告である。第二に、「教材研究―授業過程―反省と課題」が克明かつ正直に書かれているので、指導者の心の動きがよくわかり、方法の上でも内容の上でも学ぶことが多い。この点では「あはれ花びらがれ」の「鑑賞」指導の反省が印象に強く残った。

紙面の関係もあり紹介が不十分であるが、本書はくり返し読めば読むほどいろいろな発見をさせてくれる書物である。

(昭和49・3・10、文化評論出版刊、A5判)

三九九ページ二〇〇〇円)

(世羅博昭)